



Title	漢字文化圏における「無」ではじまる混種語についての研究：存在性の否定を示す接頭辞「無-」とベトナム語における独自の用法を中心に
Author(s)	チャン, クォック ヒエップ
Citation	EX ORIENTE. 2026, 30, p. 123-162
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104289
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

◎論文

漢字文化圏における「無」ではじまる 混種語についての研究

——存在性の否定を示す接頭辞「無-」とベトナム語における独自の用法を中心に——

チャン クォック ヒエップ

キーワード：「無-」、混種語、存在性の否定、強意、漢越感覚

1. はじめに

言うまでもなく、古典中国語（『論語』『孟子』『左伝』など中国の古典文学作品や仏教経文に使用される言葉）に起源をもつ漢字や漢語は周辺諸国に伝播し、それぞれの言語に借用されてきた。その結果、漢語（字音語）は日本語に限らず、韓国語（広義には朝鮮語）やベトナム語など東アジア諸言語に広く浸透している〔富田 2013: 51–52〕。その中でも、漢字文化圏全体において宗教・思想と深く関わる語の代表例として、「無」ではじまる語が挙げられる。これらの語の伝播に伴い、語そのものだけでなく、語構成要素としての「無-」も各言語に受容され、それぞれ独自に発展してきたと考えられる。本稿は「無-」にかかわる借用・受容・発展を明確にするため、中国語・日本語・韓国語・ベトナム語における「無」ではじまる語を取り上げ、その実態を明らかにし、相互に対照することを目的とする。

本稿は、これまで主に漢語由来の否定接頭辞「無-」の用法に注目してきた先行研究とは視点を変え、「無-」が接頭辞・語構成要素として語種が異なる語基と結合して形成される混種語に焦点を当てるものである。混種語（*hybrid*

word) とは、異なる言語的起源をもつ要素（語基や接辞など）を組み合わせで構成された語のことである。「無」ではじまる混種語を検討することで、漢語から借用された接頭辞「無-」が、漢字文化圏の各言語においてどのように融合しているかを把握することができる。本稿では、「無」ではじまる混種語のうち、漢語に由来する「無-」が、それぞれの言語における固有語や外来語と結合して形成された語を対象とし、その語形成の特徴と意味的機能を明らかにする。特に、ベトナム語において「無-」が接頭辞として独立し、特定の語基において新たな意味・機能を獲得している点に注目する。こうした意味的転化・拡張の背景や構造的特徴を分析することで、「無-」という接頭辞が、ベトナム語においてどのように再解釈・再機能化されているかを明らかにすることを目的とする。

本稿は、以下の構成により展開する。第1節では、研究の目的と課題を提示し、全体の構成を概説する。第2節では、これまでの先行研究を概括し、現段階で残されている課題や未解明の点を整理する。第3節では、漢字文化圏における「無」ではじまる語の実態、「無-」の語構成における意味・機能を概括する。第4節は考察の中心として、漢字文化圏に属する中国語・日本語・韓国語・ベトナム語における「無」ではじまる混種語に着目し、それぞれの語形成の特徴と傾向を比較・分析する。第5節では、ベトナム語における「無」ではじまる混種語を中心に分析し、接頭辞「無-」の意味・機能を再考する。ここでは、否定の意味だけでなく、他の意味的機能への拡張や語との相互作用に注目する。特にベトナム語における「無-」の新たな意味的機能に焦点を当て、英語やその他の言語に見られる「強意」との比較を通じて、その意味形成のメカニズムと語用論的側面、さらに周辺の言語現象との関連性について考察する。最後に第6節では、本稿の成果をまとめ、今後の課題と展望について述べる。

2. 先行研究

漢字文化圏における「無-」に関する先行研究は、主に三字漢語における接

頭辞「無-」の造語機能に焦点を当てており、なかでも朴 [2018] の研究では、日本語と中国語・韓国語との比較が詳細に行われている。具体的には、中国語において「無(无)」は、語彙的否定にとどまらず、文法的否定も担う語として用いられている。朴 [2018] は、中国語の「無」が「有の反対」「不の意味」「…にかかわらず」といった複数の用法を持つことを指摘し、日本語の「無-」が主に語彙的否定に限定されるのに対し、中国語ではより幅広い文法機能を果たしている点に注目している。一方、日本語では「無-」と二字漢語の組み合わせが一語として認識されやすく、「無-」によって形成された派生語は、構文中で主語や述語としての用法が制限される傾向がある点が特徴的である。日本語と韓国語の比較においては、朴 [2018] が、韓国語の「無(무)」も日本語と同様に接頭辞として否定を表す機能を持ち、主に漢字語と結びつくことを明らかにしている。そのうち、日越両言語の対照研究では、「無」ではじまる語における意味や用法のずれが注目されており、村上・今井 [2011] の研究が代表的である。このようなベトナム語における「無」ではじまる語の語義と、日本語をはじめとする他の言語における同形語との対照には一定の学術的意義が認められるが、「無-」という接頭辞自体がベトナム語や日本語など他の言語と比較してどのような特徴を持つかについては、十分に論じられていない。

Nguyễn Đình Hoà [1997] は、ベトナム語における漢越要素 vô [無]¹の使用に注目し、その意味的特徴と語形成における役割について論じている。Nguyễn Đình Hoà [1997] は、vô [無] が英語の否定接辞「un-, im-, -less」に対応する用法を持つことも指摘しており、vô danh (unknown)、vô lễ (impolite)、vô gia cư (homeless) などの例を挙げている。しかし、vô [無] が漢越語 (Sino-Vietnamese vocabulary) だけでなく、ベトナム語の固有語 (Native Vietnamese) とも結合し、混種語で特有の意味や強意を生む点に着目している。例えば、vô chừng (限りがない)、vô kể (数えきれないほど多い)、vô lo (心配がない)、vô lối (無闇な)、vô thiên lúng (無数の) といった表現が紹介されており、これらは単なる否定を超えて、程度の強調や慣用的な意味を含んでいるとされる [Nguyễn Đình Hoà 1997: 62]。このように、漢字文化圏におけるベトナム語

の「無-」の受容・発展・変化については新たな視点が提示されているものの、固有語との結合において生じる強意が、*vô*〔無〕本来の否定的意味とどのように関連しているのかについては明確にされておらず、語の構造的・意味的变化に関しては、さらなる検討の必要性が示唆されている。

Phan et al. [2025] は、ベトナム語における否定接頭辞 *vô*〔無〕、*bất*〔不〕、*phi*〔非〕の起源と発展を分析し、これらが古典中国語との言語接触を通じて段階的に借用されたものであることを示している。特に、Matras & Sakel [2007: 829–830] および Sakel [2007: 15] の借用区別— *Matter-based borrowing* (MAT、物質的借用) と *Pattern-based borrowing* (PAT、パターンの借用) —の枠組みに基づいて分析している。ここで、MAT は他言語から具体的な言語的素材、すなわち語形そのものを借用する現象を指す。一方、PAT は語形ではなく語構造や文法的特徴、すなわち接辞の機能や意味の借用を指す。その結果、接頭辞 *vô*〔無〕、*bất*〔不〕、*phi*〔非〕は当初、古典中国語から語構成要素 (MAT) として導入され、その後、語形成パターン (PAT) として定着し、ベトナム語の造語において接辞的な役割を果たすようになったと述べている。この3つの否定接頭辞の中で、Phan et al. [2025] によると、*bất*〔不〕は、単なる否定接頭辞にとどまらず、*bất cứ* (たとえどんな～でも) や *bất chấp* (～をものともせず) のように、意味の漂白と文法化を経て、強調や包括的な意味を表す機能へと発展しているという。具体的に、*bất chợt* (突然に) や *bất thành tâm* (不意に) のような語では、語基の意味を強める用法もあると述べている。このように、*bất*〔不〕がベトナム語内部で新たな機能を獲得し、語構成に積極的に関与していくプロセスは、漢字文化圏に特有の現象として注目されてきた。一方で、*vô*〔無〕にも *vô khối* (〈無・多い〉=非常に多い) といった新しい意味・機能の例が指摘されてはいるが、*bất*〔不〕と比べるとその顕著さは乏しく、既存語からどのように新たな意味や機能が形成されたかについての説明は十分になされていない。そのため、*bất*〔不〕と比べて *vô*〔無〕が意味拡張や構造的役割においてどのような違いを持つのかは、未だ明らかにされていないと言わざるを得ない。

本稿では、このような先行研究を概観した上で、以下の3つの課題を設定し、研究を進める。第一の課題は、漢字文化圏における「無-」に関する研究の中で、ベトナム語における「無-」の意味・機能に関する空白を埋めることである。本稿で明らかにした点を既存の研究成果と対照し、ベトナム語における「無-」の共通点および相違点を明示する。第二の課題は、ベトナム語における「無-」の新たな機能の獲得を明確にし、それを言語の内的側面（語構成・意味拡張など）と外的側面（他言語との接触・影響など）から分析することである。第三の課題は、ベトナム語において *vô*〔無〕と *bất*〔不〕の両者が新しい意味を獲得している点に着目しつつ、両者の相違を明らかにすることである。特に、*vô*〔無〕が本来の「～がない」という意味から転じて、「多い」の意を強調するという独特な現象に注目し、その語用的・意味的特徴を明確にする。

3. 各言語における「無」ではじまる語の調査および意味の再考

本稿は、まず「無」ではじまる語を漢字文化圏全体から抽出し、その中でも特に「無」ではじまる混種語の存在に注目する。一見すると、それぞれの言語における混種語の数は多くないように見えるが、接頭辞、語構成要素としての「無-」は、各言語における受容・変化・発展を見極める上で非常に重要である。「無-」がそれぞれの言語体系の中でどのように変化しているかを観察することは、言語の変遷を考察する上でも意義深いと言える。

3.1 「無」ではじまる語の調査

「無」という漢字は本来漢字文化圏で共通であるものの、現代においては各言語で異なる形に変化している。例えば、日本語では古典中国語から借り入れた「無」がそのまま使用されているが、中国語（本土）では簡体字の「无（*wú*）」が用いられ、韓国語（広義の朝鮮語）ではハングルで「무（*mu*）」として定着している。一方、漢字を廃止したベトナム語では、*Chữ Quốc ngữ*

(チュー・クォック・グー)と呼ばれる独自のローマ字表記体系において、vô [無]が使われている。このように、「無」ではじまる語を4言語で比較する際には、現代の表記そのものに固執する必要はない。むしろ、それぞれの言語における「無」ではじまる語を漢字表記に置き換えれば、言語間での対応が取りやすくなる。

本稿では、各言語の大型辞典を基準としたデータベースを作成する。具体的には、中国語の「无」ではじまる語は『中国語大辞典』[香坂 1994]から、韓国語の「無(早)」ではじまる語は『朝鮮語大辞典』[塚本 1986]から、いずれも日本語対訳付きの辞典から語を抽出する。ベトナム語については、『*Đại từ điển Tiếng Việt*』[Nguyễn Như Ý 1999]と、日本語対訳付きの『詳細ベトナム語辞典』[川本 2011]を用いる。日本語に関しては、『大辞泉 第二版』[松村 2012]を資料とし、そこからデータを収集した。収集対象は、固有名詞を除いた二字漢語、三字漢語、混種語であり、特に「無」ではじまる語に焦点を当てる。各言語における「無」ではじまる語の語数と割合を図1と図2に示す。

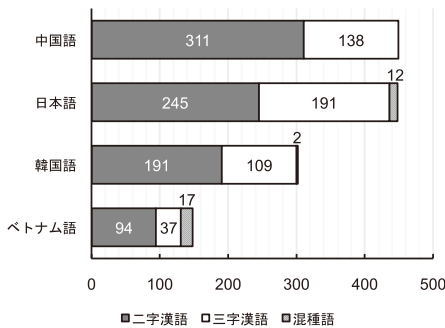


図1 「無」ではじまる語の
種類別統計数

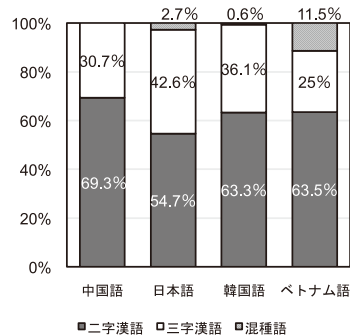


図2 「無」ではじまる語の
種類別出現割合

図1と図2から、漢字文化圏における「無」ではじまる語の実態には、言語ごとの特徴的な傾向が見られることがわかる。

中国語では、「无」ではじまる二字漢語が最も多く、311語を占めており、

これは他言語に比べて顕著に多い。この特徴は図2の割合にも顕著に現れており、統計全体の69.3%を二字漢語が占めている。これは、中国語において簡潔で安定した語構造が好まれる傾向を反映しており、否定の接頭辞「無-」が比較的単純な形で名詞と結びついて語彙化していることを示している。しかし、三字漢語も138語で30.7%とかなりの割合を占めており、現代中国語において「无」ではじまる語は生産性が高く、新たな語の造出にも機能していることが窺える。

日本語では二字漢語(245語)も一定数存在するが、三字漢語(191語)および混種語(12語)の数も少なくない。図2の割合を見ると、二字漢語が54.7%、三字漢語が42.6%となっており、中国語とは対照的に、二字漢語の割合が5割強に留まり、三字漢語の割合が高い点特徴的である。これは、「無-」が否定接頭辞として新造語の形成に積極的に用いられ、複数の要素と結合して新たな語を生み出す造語力の強さを示している。また、混種語も2.7%ながら存在している。

韓国語では、中国語や日本語に比べると「早(無-)」ではじまる語の総数(302語)はやや少ないものの、図2の割合では二字漢語が191語で63.3%、三字漢語が109語で36.1%、混種語が2語で0.6%となっている。二字漢語の割合は中国語よりは低いものの、日本語よりは高い中間的な傾向が見られる。このことから、漢字語の使用がある程度限定されつつも、「早(無-)」の接頭辞的使用は活発であり、二字漢語との結合による語形成が幅広く行われていると言える。

最後に注目すべきはベトナム語の事例である。二字漢語(94語)や三字漢語(37語)も見られるが、その数は他の言語と比べて少ない。図2の割合を見ると、二字漢語が63.5%、三字漢語が25%と、二字漢語が最も高い割合を占めている。しかし、特に注目すべきは混種語の存在であり、その割合は11.5%と、日本語や韓国語に比べて際立って高い。これは、ベトナム語において語種の混淆を通じて「無-」ではじまる語が取り込まれてきた実態を反映している。

総じて、「無」ではじまる語は、各言語における語形成の体系や言語使用環境の違いに応じて、異なる発展を遂げている。中国語では二字漢語を中心とした「無」ではじまる語が発達し、日本語や韓国語では三字漢語の形成や語の多様化を通じた発展が見られる。一方、ベトナム語では借用による二字漢語を保持しつつも、混種語として新たな語が構築されていることが、図1と図2の分析から明らかとなった。

3.2 「無」ではじまる語の意味と「無-」の意味・機能について

3.1での調査に加えて、漢字文化圏における「無」ではじまる語については、二字漢語の意味とその特徴にも言及する必要がある。(1a)で取り上げた「無」ではじまる二字漢語には、古典中国語に由来する語が多く含まれており、現代の各言語においても使用されていることが確認された。また、「無産階級」がドイツ語 *Proletariat* の翻訳として作られた結果、「無産」のような語が、日本語で外国語を翻訳する過程で新たに造語され、それが漢字文化圏全体に広がった例も見られる[北原他 2002: 944]²。しかし、(1b)のような語はそれにとどまらず、「無-」が否定の接頭辞として他の語と結びつき、派生語の三字漢語など、より複雑な語形成にも関与している。「無」ではじまる語の意味は、基本的に「～がない」というパラフレーズ（言い換え）と、それに続く語基の意味が結びつくことで構築されており、そこからさまざまな意味が簡潔に表現されている。

(1) a. 無罪／无罪／무죄／*vô tội*：罪がない。

無学／无学／무학／*vô học*：学識がない、学問がない、教養がない。

無形／无形／무형／*vô hình*：形がない、目に見えない。

無産／无产／무산／*vô sản*：生産手段を持たないこと。

b. 無条件／无条件／무조건／*vô điều kiện*：何の条件もつけないこと。

無政府／无政府／무정부／*vô chính phủ*：政府の存在しない状態。

無責任／无责任／무책임／*vô trách nhiệm*：責任がない。

(1) で取り上げた語は、漢字文化圏全体で共有されており、意味も非常に類似している³。また、語義の解釈においては、「無-」が「～がない」というパラフレーズを持ち、「存在性の否定」が典型的な意味であると言える。これは、相原 [1986: 68] が述べるように、「語基の表す事象が存在しない」ことに相当する。そのため、語の意味は「合成性の原理 (*Principle of compositionality*)」に基づいて解釈される傾向がある。この特徴は、(1a) と比較した場合、(1b)の方がより顕著である。しかし、(2) で示した「無数」や「無価」といった語に見られるように、一般的な合成性の原理だけでは十分に説明しきれない語義の特殊化も確認される。

(2) a. 無数／无数／早𠬞／ vô số : *数がない

→ 数え切れないほどの多さ、または非常に多いこと。

b. 無価／无价／𠬞𠬞／ vô giá : *価格 / 価値がない

→ 値のつけられないほどの高い価値がある、貴重なこと。

本稿では、チャン [2025: 64] に倣って、「無数」や「無価」に見られるような語義を「特殊な意味 (*special meanings*)」と定義する。特殊な意味とは、接頭辞「無-」と語基の意味の単純な総和ではなく、両者の意味が融合することによって新たに生じた語義を指す。「無数」は「無限」「無尽」に見られるように「限りがない」ことから「(限りなく) 多い」という意味を生じる。また、「無価」の類は「無比」「無類」などのように「比較できない」という中間的意味を経て「良い」を表すようになり、特殊な意味を獲得するに至った。この語彙的否定の再解釈過程として、日本語の「無-」語に見られる特殊な意味を説明することが可能である。Givón [1978: 83–88] が論じるように、語彙的否定は単なる命題の反転ではなく、語の内部に否定的形態素が組み込まれる。その解釈は文脈的・概念的条件に依存し、否定の意味は「何が通常・期待される状態か」という認知的前提を基盤として語用的に再分析されるため、形態的な否定が必ずしも「欠如」を意味するとは限らない。

このメカニズムは、スカラー的概念である「数」や「価」を含む「無-」ではじまる語において顕著に見られる。「無-」は単なる「0（ゼロ）」ではなく「尺度の限界を超える」方向へと意味を転じることで、「無数」は「数がない」ではなく「数えきれないほど多い」、「無価」は「価値がない」ではなく「価値を測れないほど高い」と再解釈される。ここでは、否定が「欠如」ではなく「超越」を示すように機能しているのである。その結果、「無-」ではじまる語の特殊な意味は、「多い」と「良い」という二つの肯定的方向に大きく分類可能である。「無数」は数量的スケールの上限方向への拡張であり、「無価」は評価的スケールの上限方向への拡張である。これらはいずれも、否定接頭辞「無-」が語基の意味と結びつく際に、「具体的な数値や基準では測れないほどの状態」という中間的解釈を経て、比喩的に強調・誇張された意味として生じたと考えられる。すなわち、接頭辞「無-」は単に「存在しない」ことを示すのではなく、「通常の範囲を超える」「想定を超える」といった認知的フレームを喚起し、語全体に「超越性」や「非現実性」を付与している[有光 2013: 134]。このような語義の形成は、単純な合成性の原理では説明できず、語彙的否定が文脈的・比喩的再解釈を経て生じた語用的・認知的現象として理解される。

しかし、現代日本語をはじめとする漢字文化圏の言語において、「無数」が「数えきれないほど多い」という原義を維持するが、「無価」は「ただ」「無料」「無価値」などと再解釈され、「存在性の否定」としての用法へと変化する傾向が見られる。一方、ベトナム語の *vô giá*〔無價〕は、「非常に価値がある」という肯定的な意味を保持している。この差異は、「無-」の意味が日本語・中国語・韓国語では合成性の原理に基づいて再構築され、否定的用法へと引き戻されたのに対し、ベトナム語では肯定的・評価的な意味として定着したことに起因すると考えられる。これは、ベトナム語における「無-」の新たな意味・機能の形成において重要な基盤となっている。

4. 漢字文化圏の各言語における「無」ではじまる混種語

漢字文化圏における共通漢語には多くの共通点があり、接頭辞「無-」が依然として「存在性の否定」を示すことが主要な意味であることは明らかである。しかし、これまで十分に注目されてこなかった各言語における「無」ではじまる混種語に焦点を当て、「無-」が漢字文化圏全体でどのように受容され、発展してきたのかを明らかにすることは不可欠である。

4.1 中国語における「無」ではじまる混種語の不在について

瀬戸口 [2023: 75] によれば、中国語の語彙は大きく「基本語彙」と「一般語彙」に分類される。「基本語彙」とは、言語の中心的な語彙であり、その多くは単音節語で構成されているという。例えば、“天”、“水”、“走”、“吃”、“大”、“小”など、自然や日常生活に密接に関わる概念がこれに該当する。

これに対して、「一般語彙」は、“桌子”、“椅子”、“爸爸”、“妈妈”、“美丽”、“干净”、“高兴”、“小说”、“杂志”、“学生”、“老师”、“工作”、“动物园”、“图书馆”、“现代化”、“自由主义”といった複音節語を中心とする語群であり、新語・外来語・成語・方言・慣用語なども含まれる。その中、現代中国語では、意思伝達の複雑化と社会的変化に伴い、外来語の受け入れとその翻訳が著しく進展している。中国語における語彙拡張において、外来語の受容は他の漢字文化圏言語にも共通する現象であるが、その受容形式には大きな違いが認められる。Miao [2005: 29] は、現代中国語における借用語を、借用の方法に基づいて、音訳語・意訳語・字形借用語・音義併用訳語の4種類に分類している。

表1の分類を現代中国語に照らし合わせると、実際には音訳語と意訳語が外来語受容の主流をなしている。まず、音訳語とは、原語の発音に近い音を漢字で表記した語である。多くの場合、語義は考慮されず、音を模倣することが主目的となるが、一部には意味を含む場合もある。代表的な例としては、coffee → 咖啡 (kāfēi)、chocolate → 巧克力 (qiǎokèlì)、sofa → 沙发 (shāfā)、karaoke

表1 現代中国語における借用方法

借用方法	原語	拼音	中国語表記	グロス
音訳語	Compaq Disney Hummer Sears	kang1-bai3 di2-si1-ni2 han4-ma3 xi1-er3-si1	康柏 迪斯尼 悍马 西尔斯	health-cypress enlightenment-this-nun brave-horse west-you-this
意識語	Download Microsoft Sprite Wrigley's	xia4-zai4 wei1-ruan3 xue3-bi4 lù4-jian4	下载 微软 雪碧 绿箭	down-load small-soft snow-green jade green-arrow
字形 借用語	AMD (Advanced Micro Devices) CIO (Chief Information Officer)		AMD CIO	
音義併用 訳語	AIDS Barbie doll UTStarcom Adobe press	ai4-zì1-bing4 ba1-bi3-wa2-wa UT-si1-da2-kang1 Adobe-chu1-ban3-she4	爱滋病 芭比娃娃 UT 斯达康 Adobe 出版社	love-to generate-disease palm tree-to compare-doll ø-this-attain-prosperity ø-press

[Miao 2005: 29–36]

→ 卡拉 OK (kālā OK) などが挙げられる。一方、意識語は原語の意味内容を中国語の語彙や形態素を用いて訳出した語であり、構成要素ごとに訳す場合と、語全体を包括的に訳す場合がある。例えば、mobile phone → 手机 (shǒujī)、hard disk → 硬盘 (yìngpán)、black market → 黑市 (hēishì) などが前者の典型的な例である。その他、字形借用語と呼ばれるものも存在する。字形借用語とは、原語のアルファベット表記などをそのまま使用する語である。主に固有名詞や略語 (IBM、DNA など) に用いられ、語数は限られている。さらに、音義併用訳語は、音訳と意識の両要素を組み合わせた語であり、音によって原語を再現しつつ、意味を補足する構成をとる。代表例としては、可口可乐 (kěkǒu kělè) → Coca-Cola (コカ・コーラ) がある。これらの分類からわかるように、現代中国語における外来語の受容には、音、意味、文字表記のいずれか、あるいはそれらの組み合わせが用いられている。そして、すべて漢字で表記されるという特性上、語の外形から外来語であるか否かを判断することが難しいとい

う問題が生じている。

本稿は、『中国語大辞典』および北京语言大学语言智能研究院〔2025〕が開発した「BCC 語料」をもって、中国語における「無-」ではじまる語全体を考察する。その際、「無-」は日本語と同様に否定接頭辞として語形成に用いられるが、これらの語の多くが借用翻訳によって外来概念を取り入れているため、混種語の認定が極めて困難である。そこで、本稿は『現代中国語新語辞典』〔相原 2007〕を参考文献にして、現代中国語における新造語を確認した後、以下の語を抽出することができた。

- (3) 无车日（ノーカーデー）、无氟冰箱（ノンフロン冷蔵庫）、无绳电话（コードレス電話）、无限带宽（インフィニバンド）、无性婚姻（セックスレス夫婦）、无纸化（ペーパーレス化）

[相原 2007: 431-432]

これらの語は語形上、混種語とは見なされないが、語源的には外来語に由来していることは否定できない。対象となる語では、とくに語頭に位置する「无-」が「～がない」を意味し、「存在性の否定」を表しており、英語の否定接辞「non-」「-less」などに対応し、上記の語はいわゆる翻訳語であると考えられる。それらの語の語構成に見られるように、「無-」は現代中国語において、語基となる形態素の前に「存在性の否定」の意味を付加し、派生語を形成する基本的な機能を担っている。

4.2 日本語における「無」ではじまる混種語について

日本語における「無」ではじまる混種語については、近現代の翻訳語に限らず、歴史的語彙資料をみると、独自に作り上げられた語が少なくない。理由は「無-」は古代中国語から日本語に借用された否定接頭辞であるが、和語の語基と結合することで、独特な構成と語義をもつ混種語を形成してきたからである。本稿では、『日本国語大辞典 第二版』を調査した結果、「無」ではじまる

混種語が 21 語確認された。(4a) は『新明解国語辞典 第八版』などの国語辞典にも掲載されている語であるが、(4b) は主に歴史的語であり、『日本国語大辞典 第二版』にのみ掲載されている語である。また、現代日本語では、どのような語があるかをチェックするために、本稿はグーグル検索や、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』[国立国語研究所 2025] で公開されているデータを用いて、新たに 9 語を抽出することができた。これらは (4c) に示す。

- (4) a. 無口、無傷・無疵、無恙、無様、無腰、無闇・無暗、無届け、無印、無
 考え、無手、無反り
 b. 無商、無勝、無木、無晒し、無高、無目、無物、無山、無潮、不嗜・無
 嗜
 c. 無節、無歪み、無振り、無杵、無割引、無締まり、無手当、無木立、無
 接ぎ

語義の観点から見ると、(4a) および (4b) に属する語には、語構成の単純な組み合わせでは説明できない意味的複雑性が見られる。例えば、「無口」は単に「口がない」ではなく「口数が少ない」、「無傷」は「傷がない」ことから転じて「損害・失敗がない」状態、「無手」は「手段・方法がない」ことを意味しており、これらは語基のメトニミー的解釈によって成立していると考えられる。さらに、「ブ」で読まれる「無様」や「無恙」のような語では、「無-」が単なる存在性の否定を超えて、相原 [1986: 68] が述べた「価値性の否定」すなわち否定的・劣等的評価を語義に付加していることが確認できる。このような例からは、「無-」が和語の語基と結びつくことで、否定的価値を示唆する複合的意味を獲得していることがわかる。

一方で、「無傷・無疵」に見られるような、「失敗がない」「申し分がない」といった意味は、現代日本語においては使用頻度が低下し、文字通りで「傷がない」と解釈されている [北原他 2002: 911]。この変化は、語基に対するメトニミー的解釈の力が弱まったこと、および和語語基が抽象的意味を担うことが

困難になってきたことに起因すると考えられる。加えて、現代では「無-」は明確な「存在性の否定」として用いられることが多く、これに基づく新造語は、必ずしも辞典に収録されることなく口語やネット空間で流行している。実際に、(4c)の語は、「無-」が「存在性の否定」を担いながら、新たな語基と結合することで形成された現代的な混種語である。このように、現代日本語において「無-」は、その対象概念の存在の欠如を明示する機能を安定的に果たしている。すなわち、「無-」は現代語彙において、「存在性の否定」という意味・機能を中心的に担う否定接頭辞として定着していることが確認できる。

和語を語基とした語において、「無-」との意味および機能に着目する時、特に「無闇（むやみ）」という語は、一般に語構成の基本原則とされる合成性の枠組みでは、その語義を完全に説明することが困難であることが明らかになる。「無闇」という語は、一見すると、「無（～がない）」という否定の意味を持つ接頭辞が、「闇」という語基に付加されて構成された複合語のように見える。ここでの「闇」は、「暗闇」や「混沌」といった意味にとどまらず、「是非善悪などの判断を超越した、理性が及ばない状態」を象徴的に表す語であるとされる。すなわち、『新明解国語辞典 第八版』では、「無闇」の語義について、「そうする必要が（必ずしも）ないにもかかわらず、度を越して何かを行うさま」と記述しており〔山田他 2020: 1527〕、単なる「闇がない、闇が存在しない」という意味合いでは捉えられていない。語義から、当該語における「無-」は、「闇」という語基の意味内容を否定するのではなく、むしろその特徴を強調し、極端さや制御不能性といったニュアンスを前面に押し出す機能を担っていると考えられる。つまり、「無-」は単純な否定接頭辞としてではなく、語全体の意味に特異な作用を及ぼす要素として機能している。このような意味拡張的・強調的な「無-」の作用は、「無駄」や「無茶」といった和語由来の複合語にも見られる特徴である。しかし、「無駄」と「無茶」は、当て字であるという点も関わっており、語源的には必ずしも純粋な意味構成に基づいているとは限らない。そのため、これらの語の語構成には、字義と意味の間に乖離が生じている可能性がある。したがって、「無-」がどのようにして語基の意味

を強化・変容させる機能を持つに至ったのかについては、さらなる歴史的な視点からの検討が必要である。このように、「無-」が和語の語基と結びついて形成される語においては、単なる否定では説明できない複雑な意味構造が存在しており、特にその語用的・語彙的なふるまいについて、より多角的な分析が求められると言える。

日本語では、「無-」は和語のみならず、外来語あるいは外来語由来の要素とも結合し、混種語を形成する。特に専門用語・術語の訳語においてその使用が顕著であり、語数も少なくない。本稿は、コーパス（BCCWJ、jaTenTen11）および公開されているウェブ上のデータベースを対象に、「無」ではじまる混種語のうち、語基が外来語であるものを収集した。検索方法としては、コーパスにおいて「無」ではじまり、後続語が外来語であるという条件で長単位検索を実施し、さらにインターネット上の用語集等に対しては目視による個別検索を行った。その結果、多数の語が確認され、以下のような語を収集することができた。同じく、(5a) は用語辞典から抽出した語で、(5b) はインターネットから抽出した語である。

- (5) a. 無アルカリガラス (non-alkaline glass)、無コーティング観察、無βリポタンパク血症 (abetalipoproteinemia)、無γグロブリン血症／無ガンマグロブリン血症 (agammaglobulinemia)、無トランスフェリン血症 (atransferrinemia)、無セルロプラスミン血症 (aceruloplasminemia)、無カタラーゼ症 (acatalasemia, acatalasia)、無フィブリノゲン血症 (afibrinogenemia)、無コノイド綱 (aconoidasida)、無アクセント (accentless, no accent)、無リスク金利 (risk-free rate) など
- b. 無ブランド、無リスク、無エコー、無センス、無ラベル、無ビスタ、無バイアス、無トレ、無メーカー、無ダイヤ、無ランキング、無アクセス、無ハンドル、無オルガズム、無カタラーゼ、無フレーバーなど

(5) の語を見てみると、(5a) は翻訳語であり、医学をはじめとする特定分野

の専門用語として用いられることが多い。一方、(5b) は日常生活で使われる場面が多く見られる。これらの語は、語構成の観点から見ると、「存在性の否定」を示す意味素は「無-」が担い、語基は外来語の音写であり、代替できない概念や指示対象を表していることがわかる。特に (5b) の多くの場合、語の正式な定義が確立されていないか、あるいは特定の専門分野または俗語的な領域に限定されて使用されるため、その意味内容が広く一般に共有されているとは言いがたい。ただし、以下の (6) に示す語については、インターネット検索を通じて参照可能な定義が確認された。

(6) 無エコー (echo free, anechoic) : エコーが見られない状態

無リスク (risk-free) : リスクが存在しない状態

無ラベル (labelless, no label) : ラベルの表示がない様

無バイアス (zero-bias) : 偏りが存在しない様

無オルガズム症 (anorgasmia) : オルガズムに至らない症状

無アクセント (accentless, unaccented) : アクセントの規則が存在しないこと

これらの定義において、「無-」は一貫して「～がない」という基本的な否定の意味を保持しており、語基の解釈に特別な意味拡張を必要としない。つまり、外来語の語基と結合する場合であっても、現代日本語における「無-」は、その典型的な意味・機能に忠実な、直接的な否定の意味として機能していると考えられる。この点は、現代日本語における「無-」の生産性および機能のあり方をよく反映している。すなわち、「無-」は主に具体的な物質や現象を指す語基と結合し、「その対象が存在しない」という表層的かつ明示的な意味にとどまる傾向があるためである。

4.3 韓国語における「無」ではじまる語の混種語について

李他 [2004: 136] によると、韓国語の語彙体系は、固有語 (순우리말)、漢字語 (한자어)、外来語 (외래어) の3つの語種から構成されており、これは

日本語の語彙構造と多くの類似点を持つ。韓国語においては、漢字語の接頭辞「早（無-）」が一部の固有語と結合し、新たな語を形成する現象が見られる。

- (7) 무테 (mute) : 「無-」 + 「테」(^{ふち}縁) : 縁無し
 무맛 (mummat) : 「無-」 + 「맛」(^{あじ}味) : 味がしない、味が薄い

「무테」は、「(眼鏡の) フレームがない状態」を表す語であり、「무맛」は「味がしない」という意味で、口語で広く用いられている。これらの語は、日常的な概念を簡潔に表現するために、漢字語の接頭辞と固有語を組み合わせるという、朝鮮語独自の造語法を示している。この点から見ると、韓国語では、漢字語と固有語の融合が比較的柔軟に行われてきたと考えられる。ただし、実際に存在する語の数は多くなく、「無-」は、既に存在する漢字語と結合する傾向が強いことが窺える。

一方、韓国語において「早（無-）」が最も結合しやすいのは、外来語、特に英語由来の語や略語との結合である。本稿では、WORDROW のサイトを活用し、「早（無-）」をキーワードとして「～ではじまる語」を検索した。その後、抽出された語の漢字表記を確認し、一般的なウェブサイトにおいて実際の出現例と頻度を最終的に調査した。その結果、「早（無-）」は外来語と結合する傾向があるだけでなく、韓国語においてはその使用頻度と語形成の多様性が際立っていることが明らかになった。

- (8) 무가스 〈無・gas〉 : 炭酸ガスが入っていない飲み物を指す
 무알코올 〈無・alcohol〉 : アルコール分が含まれていないこと
 무카페인 〈無・caffeine〉 : カフェインがないこと
 무비자 〈無・visa〉 : ビザが不要な状態
 무비전 〈無・vision〉 : 将来の展望や目標がないこと
 무کم플렉스 〈無・complex〉 : コンプレックスがない状態
 무스펙 〈無・spec〉 : 就職活動などで要求される「スペック」(学歴や資格など)

がないこと

무매너 〈無・manner〉：マナーがないこと

무리스크이자율 〈無・risk・利子率〉：リスクがない利子率

これらの語は、SNS やインターネットを通じて一時的に広まり、新語・流行語として定着している。これは、現代韓国語において「早 (無-)」が外来語の語基と結合することにより、新たな語を積極的に創出するという、高い生産性を持っていることを示唆している。日常語において、日本語では音写で表記される「ノンアルコール、ノンカフェイン」のように「ノン-」を用いるのが一般的である。これは、韓国語における「早 (無-)」の広範な語形成能力とは対照的である。韓国語において「早 (無-)」が用いられる背景には、その優れた簡潔性と語としてのまとまりの良さがある。この特性ゆえに、日本語で見られる硬い専門用語の枠に留まらず、商品の名称・スローガン・キャッチコピーといったインパクトや訴求力が求められる造語においても有効である。また話し言葉としても、「完全にない」「全くない」といった意味を聞き手や読み手に直感的に伝えるのにも適している。このような差異は、両言語における外来語の受容のあり方や、語構造の動態性の違いを浮き彫りにしている。「早 (無-)」は、韓国語において、漢字語と結合する本来の役割に加え、固有語や外来語とも結合して新しい語を創出する、かなり高い生産性を持つ接頭辞である。

4.4 ベトナム語における「無」ではじまる混種語について

ベトナム語における vô〔無〕ではじまる混種語は、日本語と同じく、固有語とは結合するが、外来語の要素とは結合しない。混種語と言えば、もともと越化した漢越音⁴で読まれる要素からなるものではなく、純越語と見られる要素からなる語と見なすべきであるが、その境界はベトナム語で非常にあいまいである。本稿は語構成のみに基づくのではなく、語全体がベトナム人の認識において混種語とみなされる語を、ベトナム語の混種語として位置づけている。

そして、その意味を検討するにあたり、さらに3つのグループに分類し、それぞれの代表語の意味を確認する。

(9) a. vô lo 〈無・懸念する / 考慮する〉：無考えな

vô lối 〈無・道〉：無闇な

vô tội vạ 〈無・罪過〉：誰にもお構いなしの、あたり構わずの

b. vô bờ 〈無・岸〉：限りがない

vô bờ bến 〈無・岸・埠頭〉：限りのない

vô chừng 〈無・限度 / ほど〉：限りがない

c. vô số kể 〈無・数・語る〉：数えきれないほど多い

vô kể 〈無・語る〉：数えきれないほど多い

vô thiên lúng 〈無・天・ごちゃごちゃ〉：数え切れないほどの

vô lúng 〈無・数えられる〉：あふれるほど多い

vô khối 〈無・多い〉：非常に多い

(9a) の混種語では、漢越語の vô lễ [無禮] や vô học [無學] と同様に、vô [無] が否定的な意味を持つ。具体的には、vô lối 〈無・道〉は「常識に反する様子」、vô lo 〈無・懸念する / 考慮する〉は「無思慮、呑気」として否定的に用いられる。これらの用例において、vô は単に存在や行為を否定するのではなく、文脈に応じて「価値性の否定」という意味合いを帯びる点が特徴的である。しかし、vô tội vạ の vô [無] は単なる否定ではなく、後続する「罪過になる」という状態を強調していると考えられる。

(9b) では、ベトナム語における vô chừng 〈無・限度 / ほど〉、vô bờ 〈無・岸〉、vô bờ bến 〈無・岸・埠頭〉といった語は、vô hạn [無限]、vô cùng [無窮]、vô tận [無尽] と同様に、「限界の欠如」を示す混種語である。ここでの vô [無] は否定の接頭辞として機能し、後続する語 (chừng、bờ、bờ bến) が

「程度・限界」を意味することから、これらの語は組み合わせによって「非常に甚だしい」状態を表現する。つまり、否定と有界性の概念との結合を介したメタファー的解釈により、「無界性」への転換を通じて、程度の強調が実現されている。

(9c) では、「多い」という意味を持つベトナム語の中に、vô〔無〕を含む混種語が多数見られることが指摘できる。これらに共通するのは、vô〔無〕が単なる否定の接頭辞ではなく、強調や比喩的な意味を担う点である。例えば、vô kể (語りきれない)、vô số kể (数えきれないほど多い)、vô thiên lũng (膨大である) と、それに関連する vô lũng などの語は、「語りきれない」「数えられない」「混沌としている」といった表現を通じて、「極端な多さ」を表現している。一方で、vô khối (非常に多く、数えられない) については、これらとは全く異なる意味形成が見られる。ここでの khối は、本来の「塊」という意味ではなく、俗語的に「多数のもの」を指すと考えられる。このため、vô khối は「非常に多い」といった意味で用いられる。これは vô vạn / vô vạn〔無萬〕と同様に、「vô・多い」型の語における vô〔無〕が、否定から強調へと意味を拡張させ、「多い」という概念を増幅させている一例である。

このように、ベトナム語の混種語における vô〔無〕は、単なる「存在性の否定」ととどまらず、多義的かつ文法的に柔軟な接頭辞として機能しており、現代ベトナム語における語形成において重要な役割を果たしていると結論づけられる。

4.5 混種語でみる「無-」の意味・機能について

漢字文化圏における「無」ではじまる混種語を通じて、接頭辞「無-」が中国語から日本語・韓国語・ベトナム語へと、どのように借用・受容され、発展していったのかを考察し、各言語における「無-」の意味と機能の差異を明らかにした。

日本語・韓国語・ベトナム語のいずれにも、「無」ではじまる混種語は一部見られるが、日本語と韓国語においては、「無-」が外来語由来の語基と数多

く結合しているのが特徴である。その基本的な意味・機能の点で見れば、「無-」は本来の「存在性の否定」という性質を保持し、パラフレーズすれば「～がない」「～が存在しない」という意味を担っている。

一方、ベトナム語では、「無-」は既存の語形成パターンを模倣しつつ、「甚だしい」や「多い」といった意味を表す語の形成に使われる傾向がある。言い換えれば、漢字文化圏における「無」ではじまる混種語に共通して、「無-」は「存在性の否定」を示す接頭辞として機能しているが、その後、自国語内部での語形成へと発展していった点において共通性が見られる。その中でもベトナム語における「無-」は、特定の語基に付加され、後続の語の意味を強調する独立した接頭辞として用いられるようになっている。

このような変化を経て、日本語や韓国語における「無-」は、「存在性の否定」という機能をより強めてきたのに対し、ベトナム語の vô〔無〕は、「甚だしい」、「多い」という特殊な意味を構成し、強意を帯びる方向へと発達しており、これは漢字文化圏全体の中でも特異な現象であると結論づけられる。

5. ベトナム語における VÔ〔無〕の強意について

ベトナム語における「無-」は、漢字文化圏の他の言語と比較して、独自の再解釈と発展を遂げており、その借用過程は単なる語の移入にとどまらず、新たな意味および機能を付加している。この点をさらに明らかにするためには、ベトナム語という言語使用環境の観点から考察を深め、この現象を世界の言語に共通する普遍的な視点から再評価することが重要である。

5.1 VÔの意味・機能の再確認

チャン [2024: 129–130] によれば、ベトナム語の vô〔無〕ではじまる語には、古典中国語に由来する二音節漢越語が多数を占め、現代ベトナム語においても重要な役割を果たす。一方、混種語は少数ながらベトナム人による独自の造語であり、創造的発展の痕跡を示している。二音節漢越語の意味は概ね「～

がない」という否定意と語基の意味の総和で成り立つが、比喩的・抽象的な解釈を要する場合もあり、*vô số*〔無数〕や *vô giá*〔無價〕のように語義が高度に特殊化した例も確認される。特に、特殊な意味で「多い」を表す語は混種語に頻繁に継承されている点が注目される。このことから、*vô*〔無〕は単なる「存在性の否定」ととどまらず、本稿で指摘した *vô khối* のように強調的接頭辞として機能することがわかる。つまり、借用要素として導入された後、ベトナム語内部で独自に意味・機能を発展させたことが明確になった。

2020 年版『*Từ điển Tiếng Việt* (ベトナム語辞典)』[Hoàng Phê 2020: 1772] においては、*vô*〔無〕を次のように定義し、これまで言及されたことに加え、新しい情報を提供している。

vô 無 yếu tố ghép trước để cấu tạo tính từ, phụ từ, có nghĩa 'không, không có', như: *vô dụng*, *vô địch*, *vô đạo đức*, *vô học*, *vô thủy vô chung*, v.v.; đối lập với *hữu*. Nghĩa của *vô* trong tiếng Việt có khác nghĩa trong tiếng Hán. - *vô* có thể dùng để cấu tạo một số từ không Hán-Việt, như *vô kể*, *vô có*, riêng *vô khối* không có ý nghĩa phủ định 'không', mà lại có ý nghĩa trái lại: 'khẳng định nhấn mạnh' [so sánh: *còn khối thì giờ* và *còn vô khối thì giờ*]; điều đó khó giải thích, cũng như *bất* trong *bất chợt*, *bất thành hình* [đều có ý nghĩa 'khẳng định nhấn mạnh'].

日本語訳：*vô*〔無〕は、形容詞や副詞を構成する前置詞として使われ、「không, không có (ない、存在しない)」という意味を持つ。例えば、*vô dụng*〔無用〕、*vô địch*〔無敵〕、*vô đạo đức*〔無道德〕、*vô học*〔無学〕、*vô thủy vô chung*〔無始無終〕などがある；*hữu*〔有〕と対立する意味を持つ。ベトナム語における *vô*〔無〕の意味は、漢語における意味とは異なる。*vô*〔無〕は一部の非漢越語を構成する際にも使われる。例えば、*vô kể* や *vô có* などがあり、*vô khối* では *vô*〔無〕が「không (ない)」という否定的な意味ではなく、逆に「khẳng định nhấn mạnh (「非常に～、甚だしく～」の意を強調する) を意味する。[例： *còn khối thì giờ* (まだたくさん時間がある)、*còn vô khối thì giờ* (まだ無限の時間がある)]。これは説明が難し

く、bất chợt「突然」、bất thành linh「不意に」の bất「不」に見られるように、強調の意味を持つことに似ている。]

これまでに示された各種辞典は、vô「無」の意味・機能については、基本的に一致している。しかし、2020年版『Từ điển Tiếng Việt (ベトナム語辞典)』の補足説明部分には、ベトナム語における vô「無」の「強意」という独自の意味や機能（点線で示された箇所）が記録されている。こうした記述は、中国語・日本語・韓国語における「無-」とは異なる実態を示しているものの、その詳細な説明はこれまで十分に行われてこなかったのが実情である。したがって、他言語における否定接頭辞の強意を考察した上で、ベトナム語における「無-」の強意について再検討する必要がある。

5.2 英語における否定接頭辞「dis-」や「de-」の強意

「無害 - harmless」「無限 - boundless」「無意味 - meaningless」で見られるように、漢字文化圏における否定的接辞「無-」に対応するのは、英語の否定接辞「-less」である。「無-」と「-less」は単なる「存在性の否定」にとどまらず、逆説的に肯定的な評価を示す機能をもつ。例えば「無数 - numberless」や「無価 - priceless」のように、否定を媒介として「多さ」や「価値の高さ」といった積極的意味を表す。言い換えれば、否定接辞は語基を否定するだけでなく、語義を拡張・強調する働きをもち、多義性と豊かな意味内容を持つ形態素として定着している。

一方、英語の接尾辞「-less」は、語基に「～が欠如している」「～を持たない」「～がない」という否定的意味を付加するものであり、ベトナム語の「無-」のように意味の強調や逆転といった機能は持たない。その理由は、「-less」で終わる語が強調的意義を示す場合でも、それが語内のメタファー的解釈⁵によって形成されているためである。この現象は、否定接頭辞(in-, un-, im- など)を用いた語においても確認される。例えば、immeasurable、innumerable、invaluable、unbelievableのような「in-/un- (X-able)」の語は、「測れない」「数

えられない」「値付けられない」「信じられない」という否定の意味を超えて、「非常に大きい」「非常に多い」「極めて貴重」といった肯定的価値を示す。このポジティブな意味は、「無-」や「-less」と異なり、否定接頭辞が二次的に X-able の語と組み合わせることで形成される。

なお、ここまで取り上げた英語の代表的な接辞では、ベトナム語の vô〔無〕に見られる語基の強調や意味の逆転は確認されていない。これに対して、「dis-」や「de-」どの英語の否定接頭辞は、単なる否定を超えて、語義の強調や意味変化の触媒として機能することがある。以下に示す (10) は、そのような強調的・増幅的效果の例である。

- (10) a. dissolve (解く、解決する)、disannul (完全に取り消す)、disembowel (骨抜きにする)
b. defraud (だまし取る)、decomplex (複合体から成る)、denumerate (数え上げる、列挙する)、depauperize (貧困に陥らせる、貧しくさせる)、deprostrate (完全にひれ伏した、非常に謙虚である、極端に低い)、despecificate (区別する、分ける、特定する)

(10a) では、「dis-」が後続の動詞の意味を単に否定するのではなく、その動詞が示す行為を「徹底的に～する」といった意味で強調している。この現象は、(10b) の「de-」においても同様に確認できる。すなわち、「de-」も単なる否定の意味にとどまらず、語基の意味を強調し、より強い意味合いで表現する役割を果たしている。つまり、(10) で取り上げた語の「dis-」および「de-」は、語基の意味を打ち消すのではなく、それを保持したまま意味内容や評価を強調する機能を有していることが確認される。

このような強意をもつ「dis-」および「de-」については、堀田 [2016] の説明からも窺うことができる。堀田 [2016] によれば、英語の接頭辞「dis-」は、音環境や語源の影響により「di-」や「de-」として現れることがあり、「de-」とは強調の意味を持つ接辞として語源的に同一である。「dis-」は接頭辞であ

るものの、多義性 (*polysemy*) を有しており、その多義性は原義から派生したものであるとされている。ラテン語における「dis-」は、もともと「二つの方向へ」や「分離」を意味し (*discern*, *disrupt*, *dissent*, *divide* などで確認できる)、そこから「選択」「分離された状態」といった意味が派生した (*dijudicate*, *dinumerate* など)。さらにその後、「剥奪」「欠如」「否定」「反対」などの意味へと拡張されていった (*disjoin*, *displease*, *dissociate*, *dissuade* など)。堀田 [2016] はこれらの語の使用例から、接頭辞の意味は語基との関係性において決定される場合があると述べている。しかし、語基自体に「分離」や「否定」といった意味がすでに含まれている場合、「dis-」は事実上その意味を強調する役割を果たす。例えば、*dissolve*, *disannul*, *disembowel* に見られる「dis-」は、後続の動詞の意味を強める要素として機能していると考えられる。

このように、「dis-」のような接頭辞は、本来の「否定」という意味から逸脱し、語基の意味を強調する機能を果たすことがある。この現象は、否定接頭辞が語全体に「甚だしく～」という意味を付加する語用論的機能、すなわち意味の拡張の一例であり、本来の否定的意味が漂白 (*bleaching*) される過程で生じたものと考えられる。Bybee [2019: 179] によれば、漂白とは文法化の過程で語彙項目がもともと持っていた具体的な意味を失い、より抽象的・一般的な意味へと変化する現象を指す。「dis-」が接頭辞であるにもかかわらず、特定の語基と結合する際に否定的意味が薄れ、語全体に強調的なニュアンスを与えるのは、まさにこの漂白の結果であると言える。言い換えれば、否定接頭辞であっても本来の「否定の意味」が弱まる場合があり、語義解釈に基づいて強意が派生することもあるといえる。

5.3 ベトナム語の使用環境からみる VÔ [無] の強意について

英語の「dis-」や「de-」に関する堀田 [2016] の議論を踏まえ、本稿では、*vô khối* 〈無・多い〉に見られるように、「多い」を強調する機能を持つのは、(11) で示された「多い」を意味する *vô* [無] ではじまる語から派生・抽出された語義が背景にあると考える。(11) で取り上げた語では、「～がない」とい

う基本義から、「～ないほど多い」というメタファー的解釈が生じ、最終的に「多い」という派生義が語義として定着している。その結果、*vô*〔無〕は「ない」という本来の意味から、語構成要素として「多い」の意味を構築するようになり、さらに語基がすでに「多い」を示す場合には、*vô*〔無〕が強調の接頭辞として機能している。すなわち、混種語において *vô*〔無〕が強調的な接頭辞として用いられることで、このような語義が形成されたと解釈できる。

- (11) *vô hạn*〔無限〕：限りがないほど多い
vô tận〔無盡〕：尽きることがないほど多い
vô lượng〔無量〕：見当もつかないほど多い
vô số〔無数〕：数えられないほど多い
vô số kể〈無・数・語る〉：枚挙にいとまがないほど多い
vô kể〈無・語る〉：(数えようとしても) 数えきれないほど多い
vô vạn / *vô vàn*〔無萬〕：「無・多い」→きわめて多量、膨大な
vô khối〈無・多い〉：非常に多い→多量に、どっさりと⁶

同様に、*bất*〔不〕は(12)に示すように、「気づく」や「慮る」といった意味をもつ動詞の語基と結びつくことで、「行為性の否定」を典型的な意味で「不意に」「突然の」といった語義を形成する。だが、*bất chợt*〈不・突然〉(突然に、不意に)や *bất thỉnh linh*〈不・不意に〉(突然に、にわかに、一挙に)といった語では、*bất*〔不〕は「～しない」という否定の意味ではなく、語基が「突然」を表す語基において、強調的な接頭辞として機能していることがわかる。

- (12) *bất đồ*〔不図〕：思いがけず、案に相違して
bất ý〔不意〕：不意に、うっかり、油断して
bất trắc〔不測〕：思いがけなく、思いもよらない
bất giác〔不覺〕：思わず、知らず識らずのうちに

bất thần [不振]：突如として、だしぬけに

bất ngờ <不・思いがける>：意外にも、まさか、心ならずも、びっくりする

bất chợt <不・突然>：きわめて突然に→（前触れなく）ふと、不意に、
図らずも、思いがけず

bất thành linh <不・不意に>：あまりにも不意に→（予期せぬ瞬間に）唐
突に、藪から棒に、にわかに

vô [無] と bất [不] は、いずれもベトナム語の混種語において「甚だしく～」「非常に～」といった程度の強調機能を持つ接頭辞として用いられている。これらは強調的機能を獲得する過程において類似した発展を示すものの、構築される語の意味の種類には明確な違いが認められる。具体的には、bất [不] は「不意」を意味する語基と結びつくことで、「非常に不意な」「きわめて驚かせるような」といった意味を形成しており、否定ではなく意外性の高さを強調する機能を果たしている。一方、vô [無] は「多い」を示す語基と結合し、「甚だしく多い」「非常に多い」といった意味を構築することで、やはり量の多さを強調する機能を担っている。重要なのは、こうした強調的意味の現れ方には一定の語基制約が存在しており、その制約が vô [無] と bất [不] の意味的展開の方向性の違いを決定づけていると考えられることである。このように、vô [無] と bất [不] による強意は、いずれも語基の意味内容と調和的に統合され、語全体の意味形成に寄与している。さらに、こうした相違の背景には、ベトナム語話者が新たな語を構築する際に既存の漢越語の語構成を参照・模倣している点がある。また興味深いのは、vô [無] が本来持っていた「存在しない」「欠如している」といった否定的意味とは正反対に、「多い」「極めて多い」といった意味を構築していることである。これは語構成要素の意味変化における逆転的な機能転換の一例と捉えることができる。

ベトナム語における接頭辞 vô [無] は、本来の否定的意味から「非常に～」といった強意へと変化する現象であり、この変化はベトナム語の使用環境から明らかにすることができる。この意味変化は、古典中国語の影響を受けつつ

も、語の構成要素ではなく語義の解釈の面で生じたものである。言い換えると、「非常に～」という強意を vô〔無〕が担う用法は元来備わっていたものではなく、異分析や類推を通じて新たに生じた意味的機能であると考えられる。これは、ベトナム語話者が既存の語義から認知的に推論・構築したものであり、Phan Ngọc [2000: 17-19] が提唱した「*Cảm thức Hán Việt* (漢越感覚)」とも深く関連している。理由は、多くのベトナム人が漢字を理解しないため、漢越要素の意味把握においては、それを含む二音節の漢越語を抽出し、それぞれに含まれる共通の意味素をベトナム語の固有語で説明しようとする傾向があるからである [Phan Ngọc 2000: 45-51]。この過程で共通する意味素が抽出され、それが新たな語の構築において用いられることで、独特な意味や機能が生み出されるようになった。また、このような「*Cảm thức Hán Việt* (漢越感覚)」の背景には、ベトナム語の漢越要素が字形ではなく字音に依拠して意味を獲得してきたという事情がある。したがって、語構成要素としての vô〔無〕が、本来の「否定の意味」ではなく「多い」という意味に結びついたことは、音声的類推に基づく再解釈の産物とみなすことができる。このような習慣により、vô〔無〕は「～ない」という否定の意味を保持しつつも、強調的機能としての「多い」という意味も兼ね備えるようになったのである。

この観点から見ると、vô〔無〕ではじまる混種語は庶民の口語表現として広く浸透している。特に「多い」を示す語は誇張的表現として、実際の会話において対象の規模や程度を強調する役割を果たしている。この点は、否定接頭辞 vô〔無〕が語用論的に誇張効果を担うための適切な言語環境がベトナム語に存在することを示している。これは、Trần Ngọc Thêm [2000: 163-166] が指摘するベトナム語の「象徴性」「感情性」「動的柔軟性」といった特徴に起因するのであり、vô〔無〕ではじまる語は特に「感情性」において顕著な機能を果たしている。これらの語は話し言葉で誇張的かつ感情的な表現として多用され、話者の主観的態度や価値評価を伝える語用論的手段として機能している。すなわち、表面的な否定接頭辞が事実で強調手段として用いられる現象は、ベトナム語に限らず、世界言語の感情表現の文化的・言語的傾向と深く結びついてい

るのである。このように、否定は単なる「ない」の表明にとどまらず、その不在性を契機として意味的極性の拡張や評価の方向への転換をもたらす構造的・語用論的基盤が、ベトナム語には存在する。

このような意味変化は当初「誤用」として捉えられていた可能性もあるが、同様の語構成が多く現れることで語用的に再現され、やがて「慣用」として定着したと考えられる〔井上 1986: 40–54〕〔中山 2016: 224〕。これは「誤用」から「慣用」への言語変化の典型例であり、用法に基づく意味変化の一形態と位置づけられる〔Traugott 2003: 126〕。ただし、*vô*〔無〕のこの特別な意味・機能が定着している語数は限定的であり、通時的・共時的に見ても「正用」とは言い難い。したがって、*vô*〔無〕に見られるこの強意は「多い」という特殊な意味を有する *vô số*〔無数〕や、*vô vàn* / *vô vạn*〔無萬〕などの語において、語構成要素としての *vô*〔無〕に拡張解釈が施されることで形成されたものである。そして、その強意が、混種語の一部へと選択的に反映された現象であると結論づけられる。さらに、*vô khôi*〈無・多い〉(非常に多い)という語の構成と意味の成立を考察した結果、*vô*〔無〕は古典中国語のような単純な否定の意味ではなく、結合される語基の意味内容や評価を強調する機能を担っていることが確認された。これは古典中国語には見られない意味・機能であり、ベトナム語独自の言語発展の一例であると言える。

5.4 否定から強意への意味変化でみる *VÔ*〔無〕の副詞的強意について

言語学的観点から見ると、本来の否定的意味から「非常に～」といった強調的意味へと変化する現象は、ベトナム語および世界の諸言語における強意語 (*intensifier*) の文法化の起源と比較することができる。強意語は本来の意味を失い、程度の強さだけを示すようになり、これは意味の漂白によるものである。さらに、強意語は頻繁に用いられるうちに意味がすり減るため、新しい強調表現が次々に生み出される。その供給源のひとつが「否定的な感情語」である〔堀田 2012〕。日本語では「恐ろしく優しい」「痛く感心した」「ひどく喜んだ」など、否定的意味と矛盾する語との共起が可能になるほど、質的意味

が薄れ、程度強調副詞として機能している [増井 1987: 78]。英語でも *terribly*、*awfully*、*horribly*、*dreadfully* など、恐怖や苦痛を表す語が「非常に」「とても」という意味の強意語へと変化している [有光 2011: 131–132]。このように、「恐ろしい」「痛い」「ひどい」といった語は、本来は負の感情の質を表すが、副詞としてその感情の強さ(程度)が注目されるうちに、次第に「とても」「非常に」といった量的な強調の意味へと転化していく、いわゆる「質から量への意味変化」が起こる。ベトナム語の話し言葉でも、*ghê* (ひどい)、*góm* (恐ろしい)、*kinh* (恐れる)、*khíép* (怖がる)といったマイナスの意味をもつ形容詞や動詞が、他の形容詞の後に付くことで「非常に～」「甚だしく～」を示す程度強調副詞、いわゆる強意語として機能する。ただし、(13a) の英語や (13b) の日本語とは異なり、(13c) のベトナム語におけるこれらの語は、語形変化を伴うことなく、そのまま強意語として機能する。この事実は、ベトナム語の語彙が形態的な制約を受けず、柔軟に機能し得るという特徴を反映している。

(13) a. I'm terribly sorry. (本当にすみません。)

She's awfully kind. (彼女はとても親切だ。)

I'm horribly busy today. (今日はとても忙しい。)

It's dreadfully cold outside. (外はひどく寒い。)

b. 彼女はすごく親切な人である。

彼は恐ろしい優しさで接してくれた。

ひどく喜んでいた。

痛く感心した。

c. *Thằng này tốt tính ghê!* (この子、本当に性格がいい!)

À ta khéo nịnh góm! (あの子、お世辞がすごくうまい!)

Gần đây gạo đắt kinh! (最近、米が恐ろしく高い!)

Chợ ngày thường, người đầu mà đông khíép! (平日の市場なのに、人でめっちゃ混んでいる!)

このように、否定的感情語が強意語化する過程は、言語に普遍的な「質から量への意味変化」の一例である。その背景には、生命の危機に関わる恐怖などの否定的感情に根ざした言語的要素が強意語として用いられることがあり、これは恐怖・怒り・嫌悪といった否定的感情が認知や言語行動に強く影響する認知的・情動的傾向であるネガティビティ・バイアス (*negativity bias*) によって説明できる [Jing-Schmidt 2007: 433–435]。

本稿で扱う *vô* [無] によって確認される副詞的強意に関しては、上に述べた副詞と異なり、英語の *dead* に見られる強意の用法と意味構造に共通性をもつと考えられる。有光 [2011: 148] によれば、*dead* は「完全に動きが止まっている」「無になっている」といった物理的側面の完全性を示すと同時に、「死ぬほど」「極端に」といった心理的側面の程度の甚だしさも表すことができる。前者は「全く」「完全に」という意味を導き、後者は「非常に」「とても」といった強調表現へと発展している。これは、*dead* が生命の終着点を示すため、「極まった」の意から「非常に、とても」へ意味がリンクされるためであり、強意語として用いられると考えられる。この点で、*vô* [無] にも類似した意味拡張が見られる。*vô* [無] の原義は「存在の欠如」を示す否定的概念であるが、「存在」の終了を示すため、ある意味で終着点をも示す。その極限的性質が転じて、「完全」「究極」といった意味を派生させることがある。例えば、「無敵」は「敵がない」という否定によるメタファー的解釈から出発しつつも、結果的に「非常に強い、絶対的な」という極限性を表す語へと転じている。このように、「欠如」や「無」といった否定的概念が、意味的には極端な完全性や強調を導く点で、*vô* [無] と *dead* の間には共通する意味的メカニズムが認められる。

- (14) a. The cat is dead asleep. (猫はぐっすり 眠っている。)
 b. She was dead tired after the long trip. (長旅のあと、彼女はへとへとに 疲れていた。)
 c. I'm dead serious about this. (これは本当に 真剣だ。)

d. You are **dead right**. (まったく正しい。/ その通りだ。)

(15) a. Người ta đồn ra **khối** chuyện lạ.
 人々 言いふらす 多い 話 不思議な
 (人々はたくさんの奇妙な話を噂している。)

b. Người ta đồn ra **vô khối** chuyện lạ.
 人々 言いふらす 〈無・多い〉 話 不思議な
 (人々はものすごくたくさんの奇妙な話を噂している。)

ただし、両者の機能は形態論的・文化的観点から区別されるべきである。(14)に見られるように、英語の *dead* は本来形容詞であり、「死んだように」という比喩を媒介して、(14d) の *dead right* (完全に正しい) では、副詞的強意用法として転用される。一方、(15a) と (15b) の意味を比較すると、*vô* [無] は語を構成する接頭辞で、基本的には否定の意味をもつが、*vô khối* の中では強調的副詞のように機能する。文化的背景は異なり、*dead* は日常語的「死」の概念に基づき、*vô* [無] は仏教思想 (空・無我) に由来する。例えば「無学」は現在「学問がない」という意味で用いられるが、仏教では本来「真理を究め、もはや学ぶ必要のない者」、すなわち修行を完成した阿羅漢を指し、最高の状態を示していた。それでも両者は、否定から「極限・完全」への意味転化を通じて強意を生むという点で共通性が指摘できる。この「極限状態＝強意」への意味的連鎖は、言語間における普遍的なメタファー構造として理解でき、概念起点としての「存在の欠如」から、程度の極致・完全性のメタファーを介して強意要素へ発展する共通の認知過程が想定される。

まとめると、*vô* [無] は本来、語構成上の接頭辞であり、自由に結合できるわけではない。それにもかかわらず、この要素がベトナム語に取り入れられると、否定の意味を強く添える漢越語要素として機能し、「ない」という否定的意味から転じて「非常に、甚だしく～」という意味を表すようになった。このように、ベトナム語において *vô* [無] は新たな副詞的機能を獲得しており、

その背景には、否定的要素が強意を表す要素へと転化するという、世界に共通する言語的基盤が存在すると考えられる。

6. まとめ

本稿は、漢字文化圏における「無」ではじまる混種語の全体像、とりわけベトナム語における「無」ではじまる混種語に焦点を当て、語構成要素としての「無-」の意味・機能を再考した。その成果は、以下の三点に集約される。

第一に、漢字文化圏全体において「無-」は否定接頭辞として機能し、日本語・韓国語・ベトナム語の各言語において、固有語や外来語と結合して混種語を構築することが可能である。特に、現代日本語および韓国語では、「無-」は生産的な接頭辞として機能し、「存在性の否定」を基盤に多くの語（特に用語）や語基と結びついて語を形成する主要な役割を担っている。これは、言語体系内部における語形成の一環として「無-」が積極的に活用されていることを示している。

第二に、ベトナム語においては、*vô*〔無〕が限定的ながらも接頭辞として用いられ、「甚だしく〜」という意味を添える強意を持つようになっている。この機能は、「多い」を示す語基と結びつくことで、その意味内容を強調する役割を果たしている。これは、ベトナム語話者の言語使用の習慣、すなわち「*Cảm thức Hán Việt*（漢越感覚）」に基づく異分析によって生じた現象である。このような意味・機能の変化は、*vô*〔無〕が単なる否定接頭辞の枠を超えて、語の意味構造に新たな機能を付加する言語的潜在力を有していることを示している。ただし、こうした強意はあくまで語用に基づいて獲得されたものであり、その造語力は限定的で、「存在性の否定」としての本来の意味を完全に代替するものではない。

第三に、ベトナム語における *vô*〔無〕の意味的・機能的拡張は、*bất*〔不〕や英語の「dis-」にも見られるように、言語類型や文化的背景の相違を超えて普遍的に生じうる言語現象であることを論証した。ベトナム語の *vô*〔無〕が副

詞的強意へと転化した機能は、否定的要素が極限・完全性のメタファーを介して強調表現となるプロセスと共通しており、言語普遍的な認知過程を反映している。だが、否定接頭辞 vô〔無〕が、ベトナム語の体系や話者の言語習慣によって、本来の意味とは正反対の「多い」という意味を構築し、「多さ」を強調する機能を持つようになったのは、世界の諸言語の中でも特異な事例の一つとして位置づけられる。今後の課題は、「無-」を他の否定接頭辞と対照しながら、ベトナム語における否定接頭辞の強調的機能が生じた理由をより深く掘り下げることである。

[注]

- 1 本稿では、漢字表記がある場合、正書法表記の後に〔 〕で示す。混種語は〈無・ 〉で表し、日本語による説明や意味は()で示す。
- 2 日本語の新漢語は既存語(文化、革命など)に新しい意味を与えて漢字文化圏で再定義され、日本語由来の混種語(立場、広場)も他国では各言語の漢字音で読まれる。ベトナム語では、日本語から直接入った語は少なく、ほとんどが中国語経由である。
- 3 中・日・韓・越の4言語で同じ漢字表記の語でも意味は必ずしも同じでなく、意味変化が生じることがある。例えば、ベトナム語の vô loai〔無類〕は副次的に「良くない」の意味を帯びる。
- 4 ベトナム語の越化した固有語とは、もと中国語由来の語が発音・意味などの面でベトナム語化し、固有語のように定着した語をいう。「無」ではじまるベトナム語の例としては vô ân〔無恩〕→ vô ơn (恩知らず)、vô pháp〔無法〕→ vô phép (失礼な)、vô loai〔無類〕→ vô loại (ろくでもない)など。
- 5 メタファー的解釈とは、語が文字通りの字義ではなく、比喩的・象徴的な意味を読み取り、ある概念を別の概念に置き換えて理解することである。
- 6 例(11)の vô〔無〕および(12)の bất〔不〕と、その意味の対応関係についてここでは点線、波線、太字を用いて示した。点線は古典中国語に由来する「否定」を、波線はベトナム語で新たに獲得された「強意」を示す。また、太字は、ベトナム人の漢越感覚において直結している接頭辞とその意味の結びつきを示している。

[参考文献]

相原茂(編)

2007 『現代中国語新語辞典』小学館、東京。

相原林司

- 1986 「不・無・非・未」『日本語学』5 (3), 67-72。
有光奈美
- 2011 『日・英語の対比表現と否定のメカニズム——認知言語学と語用論の接点——』開拓社, 東京。
- 2013 「価値があるとはどのようなことか——Value, price, cost に関する価値評価の認知と接辞による意味反転の動機づけ——」『経営論集』82, 115-135。
- 井上史雄
- 1986 「言葉の乱れの社会言語学」『日本語学』5 (12), 40-54。
- 川本邦衛 (編)
- 2011 『詳解ベトナム語辞典 (*Từ điển Tiếng Việt Nhật*)』大修館書店, 東京。
- 北原保雄 (著), 久保田淳・谷脇理史・徳川宗賢・林大 (編集委員), 前田富祺・松井栄一・渡辺実 (編集委員)
- 2002 『日本国語大辞典第二版』第2巻・第11巻・第12巻, 小学館, 東京。
- 香坂順一 (監修), 大東文化大学中国語大辞典編纂室 (編)
- 1994 『中国語大辞典』角川書店, 東京。
- 瀬戸口勲
- 2023 「中国語の語彙について——北京語との比較を中心に——」『東京国際大学論叢人文・社会学研究』8, 73-90。
- 中山英晋
- 2016 「原義とは異なる意味で使われる『誤用』例についての考察」『目白大学人文学研究』12, 221-233。
- チャン クォック ヒエップ
- 2024 「ベトナム語における VÔ [無] ではじまる語の意味についての研究」『EX ORIENTE』28, 85-135。
- チャン クォック ヒエップ
- 2025 「否定的接辞による特殊な意味の形成——CONTAINER イメージ・スキーマで見る英語の『-less』と日本語の『無・』を中心に——」『EX ORIENTE』29, 63-98。
- 塚本勲 (監修), 大阪外国語大学朝鮮語研究室 (編)
- 1986 『朝鮮語大辞典』角川書店, 東京。
- 富田健次
- 2013 『フォーの国の言葉——ベトナム語を学び、ベトナム語に学ぶ——』春風社, 横浜。
- 朴景淑
- 2018 『造語要素「不・無・非・未」の機能——日中、日韓との対照研究を視野に入れて——』名古屋大学文学研究科博士論文。
- 増井典夫

- 1987 「形容詞終始連体形の副詞的用法 —— 「えらい」「おそろしい」を中心に——」
『国語学研究』 27, 77–86。
- 松村明 (監修) 小学館国語辞典編集部 (編集)
2012 『大辞泉 第二版』 小学館, 東京。
- 村上雄太郎・今井昭夫
2011 「現代ベトナム語における漢越語の研究 (2) 日本語にもベトナム語にも使われる「漢語」のうち、意味・用法の違うもの」『東京外大東南アジア学』 16, 17–39。
- 李翊燮・李相億・蔡琬
2004 『韓国語概説』 (前田真彦訳、梅田博之監修)、大修館書店, 東京。
- 山田忠雄・倉持保男・上野善道・山田明雄・井島正博・笹原宏之 (編)
2020 『新明解国語辞典 第八版』 三省堂, 東京。
- Bybee, Joan
2015 *Language change*, Cambridge University Press, Cambridge. (Joan Bybee 著、小川芳樹・柴咲礼士郎訳 2019 『言語はどのように変化するのか』 開拓社, 東京。)
- Givón, Talmy
1978 “Negation in Language: Pragmatics, Function, Ontology”. In Peter Cole (ed.), *Syntax and Semantics*, 9 (Pragmatics), Academic Press, London, 69–112.
- Hoàng Phê (chủ biên) - Trung tâm từ điển học
2020 *Từ điển Tiếng Việt (Có chủ chữ Hán cho từ ngữ Hán-Việt)*, Nhà xuất bản Đà Nẵng, Đà Nẵng.
- Jing-Schmidt, Zhou
2007 “Negativity bias in language: A cognitive-affective model of emotive intensifiers”, In Hans-Jörg Schmid (eds.), *Cognitive Linguistics*, 18 (3), Mouton de Gruyter, Berlin, 417–443.
- Matras, Yaron & Sakel, Jeanette
2007 “Investigating the mechanisms of pattern replication in language convergence”. In Katharina Haude and Nicole Kruspe (eds.), *Studies in Language*, 31 (4), John Benjamins Publishing Company, Amsterdam, 829–865.
- Miao, Ruiqin
2005 *Loanword Adaptation in Mandarin Chinese: Perceptual, Phonological and Sociolinguistic Factors*. PhD. Dissertation, Stoney Brook University.
- Nguyễn Đình Hoà
1997 *Vietnamese: Tiếng Việt không son phấn* (London Oriental and African Language Library, Vol. 9), John Benjamins Publishing Company, London.
- Nguyễn Như Ý (chủ biên)
1999 *Đại từ điển Tiếng Việt*, Nhà xuất bản Văn hóa Thông tin, Hà Nội.

Phan Ngọc

2000 Mẹo giải nghĩa từ Hán Việt và chữa lỗi chính tả, Nhà xuất bản Thanh niên, Hà Nội.

Phan Thị Huyền Trang, Arcodia. Giorgio Francesco, Nguyễn Tuấn Cường, Shimizu Masaaki

2025 "Tracing the development of Bất, Vô, and Phi in Vietnamese: A Diachronic Study from the 13th to the 20th Century", Workshop on Vietnamese Linguistics (ISVL-4), Ca'Foscari University of Venice.

Sakel, Jeanette

2007 "Types of loan: Matter and pattern". In Yaron Matras and Jeanette Sakel (eds.), Grammatical Borrowing in Cross-Linguistic Perspective, De Gruyter Mouton, Berlin & New York, 15–30.

Trần Ngọc Thêm

2000 Cơ sở văn hóa Việt Nam, Nhà xuất bản Giáo dục, Hà Nội.

Traugott, Elizabeth Closs

2003 "From Subjectification to Intersubjectification." In Raymond Hickey (ed.), Motives for Language Change, Cambridge University Press, Cambridge, 124–139.

国立国語研究所

2025 現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) (<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>), 閲覧日: 2025 年 9 月 11 日。

北京语言大学语言智能研究院

2025 『BCC 语料』 (<https://bcc.blcu.edu.cn/>), 閲覧日: 2025 年 9 月 11 日。

堀田隆一

2012 「強意語はなぜ種類が豊富か」『hellog ～英語史ブログ』 (<https://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/2012-08-28-1.html>), 閲覧日: 2025 年 9 月 11 日。

2016 「接頭辞 dis-」『hellog ～英語史ブログ』 (<https://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/2016-07-17-1.html>), 閲覧日: 2025 年 9 月 11 日。

jaTenTen11 (日本語ウェブコーパス 2011) (<https://www.sketchengine.eu/jatenten-japanese-corpus/>) Sketch Engine, 閲覧日: 2025 年 9 月 11 日。

WORDROW (<https://dict.wordrow.kr/start/%EB%AC%B4/>), 閲覧日: 2025 年 9 月 11 日。

A Study on the Meaning and Function of " 無 -" in the Sinosphere:

Focusing on Hybrid Words Beginning with " 無 -" and Its Unique Usage in Vietnamese

Quoc Hiep TRAN

Keywords: " 無 -", Hybrid words, Negation of existence, Intensification, Sino-Vietnamese sense

Abstract

This study examines the semantic and functional roles of the prefix “ 無 -” (known as 无 in Modern Chinese, 無 - in Japanese, 무 in Korean, and *VÔ* in Vietnamese) as it appears at the beginning of hybrid words across languages in the Sinosphere, with a special focus on its unique development in Vietnamese.

First, the study confirms that “ 無 -” functions as a productive negative prefix in Japanese, Korean, and, to a lesser extent, Vietnamese. In Japanese and Korean, it commonly attaches to native or loanword bases to construct hybrid words, where it primarily signifies negation (the absence of X). This usage has become deeply integrated into the word formation processes of these languages, indicating that “ 無 -” plays a central role in coining neologisms, especially in technical and abstract vocabulary.

Second, the study focuses on the distinctive usage of *VÔ* in Vietnamese, where it occasionally acts not only as a negative prefix but also as an intensifier, particularly when paired with word bases denoting quantity or magnitude. For instance, *vô khối* 〈無・many〉 (innumerable, countless) reflects a shift from negation to an emphasis on

“無-”. This semantic transformation is attributed to a reanalysis phenomenon rooted in the “Sino-Vietnamese sense”—a cognitive tendency among Vietnamese speakers to infer meaning based on phonological similarity rather than character recognition, as most speakers do not read Chinese characters. This reinterpretation leads to new meanings through analogy, allowing VÔ to acquire functions beyond simple negation.

Third, the Vietnamese case of VÔ is further contextualized within broader typological and cross-linguistic perspectives. Similar semantic expansions are observed in other prefixes, such as BÁT [不] in Vietnamese and “dis-” in English, which can evolve from expressing mere negation to conveying emphasis or suddenness (e.g., *bất chợt* 〈不·suddenly〉, “all of a sudden”). The function of Vietnamese VÔ [無] as an adverbial intensifier parallels the process in which negative elements become emphatic expressions through the metaphor of extremity and completeness, reflecting a language-universal cognitive mechanism. These parallels demonstrate that such semantic shifts are not isolated, but may reflect universal tendencies in language change, particularly in the domain of prefixal function and reinterpretation.

In conclusion, this paper sheds light on how a historically negative prefix such as “無-” can undergo functional reanalysis and semantic expansion in hybrid word formation. The Vietnamese case, in particular, highlights a unique pathway of grammaticalization and lexical creativity influenced by sociolinguistic and orthographic factors, such as the use of Sino-Vietnamese vocabulary with meanings that differ significantly from their Chinese character origins. This study provides theoretical and empirical insight into the transformation of Sino-derived morphemes within different linguistic environments. It contributes to our understanding of language contact, lexical borrowing, and semantic shift, particularly within the Sinosphere.